は、深きが中にも深き也」と述べ、禅・密√華嚴・法華√浄土・法相・三論という教判を立て、禅密を共に深い中の深い教えであり他教よりも勝れているとし、禅密関係は同等に捉えている。

・『東寺印信等口決』での有覚本有・無覚本有(本覚思想の始覚、本覚に相当)の分類では、有覚本有は諸教(諸宗)にあり(勝劣関係がある)、無覚本有は密教のみ(禅にも)にあるとする。一方、『十牛訣』での有覚(門)・無覚(門)の分類は、有覚は諸教(諸宗)にあり(勝劣関係がある)、無覚は(禅の境地に達すれば)諸教(諸宗)にある(勝劣関係がなく、それは迷悟がなく仏や衆生もないもの)となっている。二つのテクストに於ける有覚・無覚が同じ意味合いであるかは検討が必要。

・『東寺印信等口決』では、密勝諸教(諸宗)劣という関係が基本となっているが、禅密の勝劣に関しては、「有禅僧云…」という形で三通りの事例をあげ、その中の一例において、禅の真源本有(第九・返本還源)が無仏無覚本有であるとし、禅Ⅱ密であることをいう。一方、『十牛訣』では、有覚(門)に於いては禅勝密劣とする。第十・入麈垂手の後の無覚門では諸教(諸宗)の差別がないとする。

また、新たに見つかった『菩提心論随文正決』(一三〇三年)全七巻のうち、第三巻にも禅に関する記述が見られる。そこでは禅密、諸宗の関係について禅門は無覚門であるが、禅は方寸肉団、密は八弁肉団であり、禅は顕教の中では最頂の教えとしながらも、未だ密教には及ばないとし、密勝禅劣を述べる。

これらより大枠ではあるが、大慧は禅密及び諸宗関係の勝劣

について、禅密勝諸宗劣という前提のもとで、禅密関係に関しては、ある部分同等であり、ある部分は密勝禅劣、またある部分は禅勝密劣と捉えていたのではないかと推察される。

関山国師と大灯録

木村 俊彦

宗峰妙超(一二八二—一三三七)は生前、花園上皇から「興禅大灯国師」号を授与されていた(建武四年一三三七)ので、死後、高階邦雅が上皇の内意として妙心寺開山・関山慧玄(一二七七一—一三六〇)への書状に、「大灯国師録の事、仏事・法語以下を門徒・旧参底に相尋ね編集させ給うべき由、内々伝え下さる也」とある。時期は花園上皇が開基である妙心寺開創早々(暦応元年一三三八)のことで、関山和尚の最初の大事な仕事になった。このことから、「大灯録」と法嗣・関山和尚の関わりと作成過程を考察したい。

「大灯録」は応永三十三年(一四二六)に徳禅寺の禅興が三巻本で刊行したと、元和七年(一六三一)本の跋に宗玩が書いている。第一巻は侍者・性智、第二巻の筑前・崇福寺語録は侍者・宗貞の編集、大徳寺再住後の編集は第二巻の大半で「侍者恵眼編」となっている。第三巻は「雪竇録」への下語「参詳語要」で、著述にあたるが、全編を通じて関山和尚の編集であることは高階書簡に照らして理解される。

再住後とは関山和尚が宗峰和尚から印可された元徳二年(一三三〇)の翌年からになり、この最初の「解夏小参」の語が大徳寺に残っていて、雑誌「墨美」一六五号(三〇—三二頁)に

掲載された。その直前の「七月旦上堂」の語と共に、対応する元和刊行版第二巻で見られる。およそ宗教聖典は語録の形式を辿るが、禅語録の編集過程がよく判る珍しい事例である。編集後は提唱した師のメモは破棄されたであろう。漢訳後のサンスクリット原典と同じ運命である。

先の二侍者はこのほかに名が残っていない。嘉暦元年成道の日の大徳寺開堂から記録されているから、二人の侍者は「旧参底」ということになり、関山和尚は大徳寺開創二年後の掛塔ということになる。実は南浦和尚逝去後十八年の開創で、聖胎長養二十年は足掛けということになる。関山和尚は二十年の約束を知悉していたので、敢えてそれを守られたと見られる。また道号にも印可状にも「慧玄」と宗峰和尚から書かれているのに、関山和尚は師の死後間もなくの語録編集時には、得度の師・南浦和尚から贈られた「恵眼」を使っておられるのは面白い。

ここには一夏(げ= session)三箇月近く、宗峰和尚が四月十四日から六月まで、師の南浦和尚が三十二年を過ごした筑前太宰府の横岳山崇福寺に大友氏の請いで住し、往復の旅程を含めて後醍醐天皇への百箇日の約束を果たした安堵が見られる。最初は七月一日の上堂語であり、件の資料(会場配布)が七月十五日の解夏の語である。筑前太宰府行はちょうど夏安居の期日にあたる。

「解夏小参。随处に主と作り、聖制を横岳山頭に結ぶ。立処皆真なり。賞勞を龍宝峰頂に解く。此の事を相謾せざる時、人に孤負せず。(中略)山僧に親切の一句子有り。各各分明。善く処処に忘却することを得ざるを為せ。便ち主文を卓すること

一下す。」一句子とは「各々分明」である。

問題は関山和尚が印可受領後、美濃伊深郷に「間もなく」(荻須純道「日本中世禅宗史」三三八頁)隠れて聖胎長養の道を取ったと解釈されてきた事で、それでは語録編集の辻褄が合わない。また師の崇福寺住も、関山得度の師・南浦和尚の事蹟であるから、大徳寺看護にせよ随侍にせよ退山することなく師に協力したと見るのが自然である。いずれにしても印可状を受領してから数年は師に随侍しておられたと見るのが常識的である。延元二年(建武四年 一三三七)の師の示寂後まで七年間も隠遁していたという不自然な解釈は「正法山六祖伝」の記述に始まる。小稿「関山国師の新研究」(「禅学研究」第八十七号)を参照されたい。またパンフレット「大本山妙心禅寺開山関山国師略年譜」の版が京都・石田大成社にある。

鈴木大拙と仙厓——遊戯の視点から——

嶋本 浩子

鈴木大拙が、江戸時代の禅僧、仙厓義梵(一七五〇—一八三七)の書画と出会った時、大拙はすでに八〇歳を超えていた。仙厓は洒脱な人柄と書画の作風によって、その評価は風刺画、戯画、あるいは禅漫画とみなされていた。しかし、大拙最晩年の英文著作の一つである *Sengai the Zen Master* において、大拙は仙厓の書画は単なる戯画ではないと結論づける。「仙厓和尚は近來の大禅者である。また大芸術家である。禅者であったと言ったことが、その芸術家たることを隠蔽してしまっ、その書画を「戯画」だとか戯筆だとか言うことにしてしまっ